

1. はじめに

交通事情の急変の中、黎明期の鉄橋がいとも簡単に廃橋になって行く。電子計算機も近代的な施工機械もなかった時代に、技術者の英雄的な献身によって完成されたこれらの作品が次々と単なる鉄屑に帰して行くのを食い止めることはできないものであろうか。長六橋は昭和2年(1927年)に熊本市内を流れる白川を国道3号線が横断する地点にプレストリブ・タイドアーチ橋として架設された。①洪水調節のための河川改修、②道路線形の改良、③橋梁の老朽化等を理由に新橋(PC3径間連続箱桁橋)が建設され、旧橋は今年には廃橋の予定である。昨年後半より、旧長六橋の保存の可能性を検討するための市民レベルの集まり(名称:長六橋研究会)が作られ、活動を続けているが、ここでは、旧橋の概要と保存に関する問題点について報告する。

2. 旧長六橋の概要

図-1は本橋の現況である。橋長79m、幅員21.4m 総鋼重809トンで、当初は中央に複線の市電が走っていた。慶長六年に熊本初の本格的木橋が作られたのが、名前の由来である。大正末期まで、市内には、鋼橋はなく本橋が初めてのものであった。昭和28年に熊本地方を襲った大洪水のときには、白川で唯一流れなかった橋として災害復旧に重要な役割を担った。熊本市民にとって「長六」は単なる橋の名前以上の特別な懐かしさを持ったものである。図-2はエンドポストの装飾で、当時としては大規模橋梁であるが、意匠的には繊細な配慮がなされている。

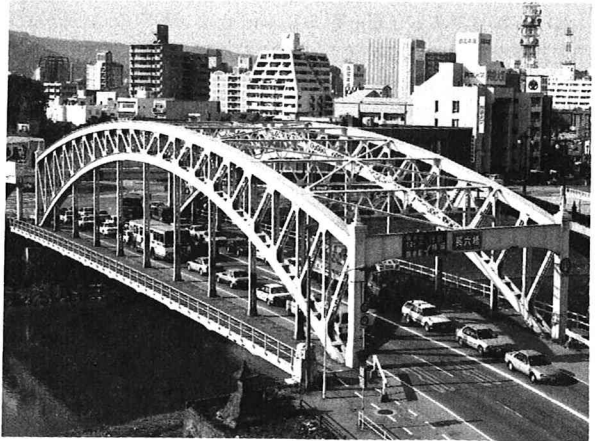


図-1 長六橋の現況 (富重清治氏提供)

本形式で我国最初のものはハッ山橋(大正3年・東京、大河戸宗治設計、廃橋)で、その後、豊平橋(大正13年・札幌、廃橋)、六郷橋(大正14年・神奈川、廃橋)、長六橋(昭和2年)、千住大橋(昭和2年、東京)と架設された¹⁾が、これらはすべて増田淳の設計である。ハッ山橋は東海道、千住大橋は奥州街道の東京に至る市門としての役割を持つ。東京以外に北海道と九州の当時の行政の中心となるべき都市にタイドアーチ橋が架設されたことも象徴的である。長六橋完成当時の新聞にも長六橋は「歴史門である」という記事も見られ、本形式のアーチ橋が、都市景観の創造に大きな役割を担っていたことがわかるし、それを十分に認識した設計²⁾が行われていたようである。年代的には上記の橋梁群が大正時代のタイドアーチ橋に分類される。

初期のタイドアーチ橋はいずれも交通事情の急激な変化と老朽化の中次々と廃橋になり、現存するのは長六橋と千住大橋のみであるが、千住大橋は下流側に桁橋が、上流側にアーチの水管橋が架かりその優美なアーチの全景を見ることができない状態である。この意味からも長六橋は大正期の我国の橋梁技術の精華を今に伝えるタイドアーチ橋

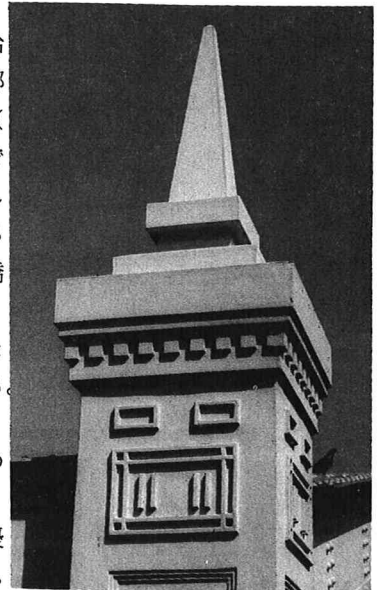


図-2 エンドポストのデザイン

として極めて貴重なものである。

3. 保存の可能性と保存案

本橋に関しては、既に新橋も完成し旧橋の撤去も決定された今となっては、国レベルへの直接の働きかけは不可能に近い。県市レベルで保存検討を行うには、地域住民の広範で熱心な保存の要求が不可欠のことである。したがって、残された数カ月の間にせめて撤去の保留にまでもって行ければ、将来的には保存・再利用の可能性はあるものと考えられる。今後2カ月間に保存呼びかけのパンフレットの作成配布、募金活動、署名運動、長六橋シンポジウム等が計画されている。以下に、いくつかの保存案を紹介する。

図-3 は前述の研究会で出された保存案の例である。図-3(a)のA点は現地保存案(歩道橋+広場として使用)であるが、この場合、新橋と平行にし、3m程の高上げが必要となる。ただし、都市の中心部にこれだけの空間のイベント広場を確保することは地方都市といえども容易なことではないが、これを労せずして手に入れることのメリットは大きなものであろう。図中のB点は移築し、建物の一部として再利用する例で、図-4が完成予想図である。図-3(b)は熊本駅周辺の再開発計画にあわせて、考えられる移設地点を示したもので、C点は跨線橋(歩道橋)の例、D、Eは駅前広場での利用例で、市門としての意味も込められている。

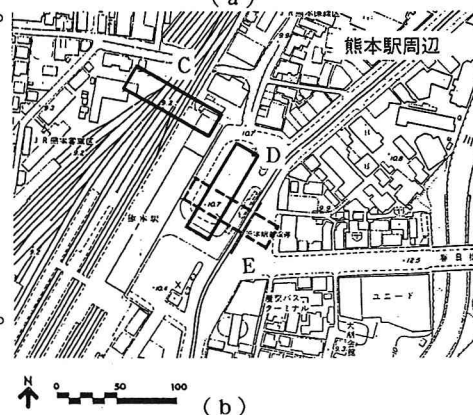


図-3 保存案の例

4. あとがき

リベット橋は百年は十分に機能するといわれている。本橋は60歳を越えたところである。現地に歩道橋としてでも残したいものである。もし、それが河川関係の拘束条件から実現不可能ならば、別の場所に現役としての働き場所を探してやりたい。美しい景観を新たに創造する事は我々に課せられた大きな任務であるが、都市の誇りとなる土木構造物を守り、古き良き景観を保存して、次の世代へ引き継いで行くことも重要な仕事である³⁾。同じ年に完成した千住大橋が現役として活躍しているのを見るにつけ、撤去の決定は残念でならない。長六だけでなく、撤去にかかわる全ての技術者に同情の念を禁じ得ない。なぜなら、先人の仕事を否定する技術者は結局は自らを否定しているに過ぎないと思うからである。また、橋梁の歴史的評価、保存の対象となるべき橋梁のリストアップとランク分けは土木学会に課せられた急務であると考える。

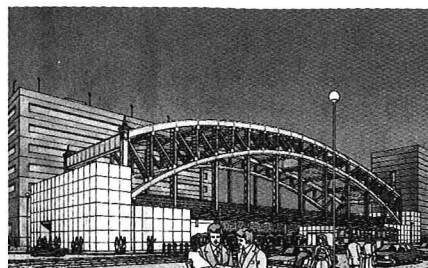


図-4 建築物としての再利用案
(「熊本地域商業近代化計画」より)

本報告をまとめるにあたり、元埼玉大学教授田島二郎先生、名古屋大学馬場俊介先生をはじめ多くの皆様のご協力を頂きました。記して謝意を表わします。日程的に講演時には保存問題の結論が出ていると思われるが、うれしい報告になるよう最善を尽くしたい。

参考文献：1) 日本橋梁建設協会編：日本の橋，1984。 2) 大河戸宗治：八ツ山橋、土木学会誌、Vol 2-6，大正5年。 3) 田島二郎他：四谷見附橋物語、技報堂、1988。